



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

彙報. 人文學報 1991, 68: 153-164

ISSUE DATE:

1991-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48356>

RIGHT:

# 彙 報

1990年（平成2年）1月～1990年（平成2年）12月

## 研 究 状 況

### I 班 研 究

#### 日 本 部

文学から何がみえてくるか 班長 飛鳥井雅道

二年目に入った当研究班では、読書会の部で『ロビンソン・クルーソー』を取り上げた。これは京都大学出版会の第一回出版物『漂荒紀事』の復刻に迎合したわけではなく、「遅れてきた国々」の近代文学成立において、この作品が必ずといって良いほど翻訳されているという事情に拠るものである。日本文学においてもそれは例外ではなく、明治期のすべてにわたってさまざまに形を変えて登場している。これらの事実をめぐって、その文学史的意味や社会背景などを本国イギリスをも含めた他の国々とも比較して探ろうという試みである。

本報告はこれとは別に各担当者の個別研究を報告していただいたが、期せずして翻訳文学、翻訳論が多く取り上げられたのは、研究会の今後の展開にとって興味深いものがある。

班員 飛鳥井雅道 宇佐美齊 大浦康介 佐々木克 鈴木啓司 富永茂樹 平田由美 藤田隆則（以上所内） 池田浩士 井上健 加藤幹郎 木村崇 三原弟平 若島正（以上教養部） 荒井とみよ（大谷大） 生田美智子 米井力也（金蘭短大） 須田千里（光華女子大） 谷川恵一（高知大） 林完枝（大阪市大） 藤元優子 松村耕光（以上大阪外大） 斎藤希史 堀田桂子

1990年

- 1月20日 異境のまなざし—文学表現が描く発見と侵略— 池田  
1920年代カフカをめぐる音楽的状況 三原

- 2月14日 熊沢蕃山と『源氏物語』 マックマレン  
4月25日 ロビンソン・クルーソーをどう読むか I 平田  
5月9日 ロビンソン・クルーソーをどう読むか II 平田  
5月23日 キリシタンの神概念とその表現 米井  
6月13日 中国近代初期の翻訳小説 斎藤  
6月27日 カメラ・アイ—語りの視角— 谷川  
7月14日 谷崎潤一郎における1920年代 井上  
—映画芸術との出会い— 林  
英文学史におけるロビンソン・クルーソーの変貌  
9月26日 『漂荒紀事』の成立事情 ゲスト 松田清  
10月17日 『あゆひ抄』の翻訳論 浜田  
10月31日 「ロビンソン」と18世紀イギリス社会—経済史・思想史におけるデフォー像の研究史整理の試み— ゲスト 京大・経・院 横山史生  
11月14日 レーモン・ルーセル—公開された手法について— 鈴木  
11月28日 「訳」（うつし）の実践—本居宣長と尾崎雅嘉の古今集俗語訳を比較して— ハーパー  
12月15日 犬を連れた奥さんの詩的中心 木村  
近代イラン文学と翻訳 藤元

近代日本のアジア認識 班長 古屋哲夫

本研究は、近代日本においてアジアという言葉が、どのような情報にもとづき、どのような目的のもとに使用されてきたかを、明らかにしようとするものである。そしてそのためには、(1)アジアからの情報が日本にもたらされる道筋と仕組、(2)日本人のアジアへの要求のあり方と進出の仕方、(3)アジアの観念

を利用した日本人の国民的使命観の創出、などの問題を検討することが必要となる。

班員 古屋哲夫 奥村弘 藤井譲治 山室信一  
山本有造 横山俊夫（以上所内） 松尾尊発 筒井  
清忠（以上文学部） 永井和（立命館大） 秋定嘉  
和（池坊短大） 尾崎ムゲン（大阪女子大） 掛谷  
宰平（立命館大） 桂川光正（大阪産業大） 木坂  
順一郎（竜谷大） 小路田泰直（奈良女子大） 三  
川譲二（京大研修員） 森田一彦 三宅栄治 張恒  
（以上京大大学院） 小泉洋（六甲高校） 斎藤勇  
（愛知大学） 里上竜平（桃谷高校） 須崎慎一  
鈴木正幸（以上神戸大） 副島昭一（和歌山大）  
武邦保（同志社女子大） 山本明 田中真人（以上  
同志社大） 福井直秀（京都文化短大） 伊藤之雄  
（名古屋大）

1990年

1月29日	明治大正期の植民論	山本
2月19日	『神戸又新日報』のアジア観について	奥村
4月16日	アジア認識研究の問題点	古屋
5月7日	書評：浅田喬二著『日本植民地研究史論』	山本
5月28日	満州イメージと満州移民政策	古屋
6月18日	初期議会の自由党と対外認識	伊藤
7月2日	研究会の運営について	古屋
9月17日	帝国議会速記録からみたアジア認識 1	永井
10月15日	神戸又新日報のアジア認識 その2	奥村
10月29日	帝国議会速記録からみたアジア認識 2	横山
11月5日	書評：Duus, Myers, and Peattie (eds), The Japanese Informal Empire in China, 1895~1937	桂川
11月19日	帝国議会速記録からみたアジア認識 3	藤井
12月3日	帝国議会速記録からみたアジア認識 4	山本

貝原益軒とその時代 班長 横山俊夫

17世紀後半から18世紀初頭にかけての安定期日本社会の性格を考えるため、貝原益軒の著述を学際的な視野から検討している。益軒の知的活動の広さと

読者層の多様さが、その著述に独特の社会性を与えていたと考えられるからである。

初年度にひきつづき資料輪読に重点を置いている。ただし、後期より、個別テーマによる発表も増している。なお本年の客員として、オックスフォード大学からジェイムス・マックマレン博士、ライデン大学からトーマス・ハーバー博士、誠信女子大学から全相運博士を迎えた。

班員 横山俊夫 全相運 塚本明 富永茂樹 平  
田由美 トーマス・ハーバー 藤井譲治 ジェイム  
ズ・マックマレン 三浦秀一 麥谷邦夫（以上所  
内） 梶山雅史（岐阜大） 白幡洋三郎（国際日本  
文化研究センター） 辻本雅史（光華女子大） 深  
澤一幸（大阪大） 三浦国雄（大阪市大） 横田冬  
彦（神戸大）

1990年

1月22日	竹田定直宛益軒書簡	三浦秀
1月29日	竹田定直宛益軒書簡	横山・平田
2月5日	竹田定直宛益軒書簡	深澤・辻本
2月19日	竹田定直宛益軒書簡	藤井・梶山
2月26日	『人倫訓蒙図彙』と『日本釈名』	横田
4月23日	益軒とベアフルウェイク 一東西養生論比較試論一	松田
5月7日	見学会 古義堂跡・闇斎宅跡・ 本法寺内本阿弥家墓所	全員
14日	益軒における物産と名所	白幡
21日	元禄8年京都『町代日記』	塚本
28日	竹田定直『弁弁道』考	三浦秀
6月4日	元禄13年京都『町代日記』	藤井
11日	益軒隠者説一『楽訓』考	横山
18日	好古『日本歳時記』考	深澤
25日	唐彪『父師善誘法』考 柳枝軒小川多左衛門墓所案内	梶山 横山
7月2日	第1回報告書打合せ	全員
10月1日	明和の「謡曲新改正」とその時代	藤田
8日	『大学或問』	横山・三浦秀
15日	『大学或問』	松田・麥谷
22日	『大学或問』	麥谷・塚本・辻本
29日	『大学或問』	辻本・白幡・藤井
11月5日	浅井了意の『雲隠抄』	ハーバー

19日 益軒『和州巡覧記』考 横山  
 26日 読益軒『大学説』 辻本  
 12月3日 益軒時代の三欧人 松田  
 「満州国」の研究 班長 山本有造

本研究は、日本の植民地支配の主要な一環をなした「満州」—中国東北地域—につきその最終形態である「満州国」期に焦点をあつめ、そこでの支配の実態を総合的に（政治的、経済的および文化的諸側面、ならびに日本植民地史および中国地方史のアプローチを合せて）究明しようとする。1年間の準備会ののち、1987年4月より正式に発足し、現在隔週月曜日に研究会を開いている。

関西における関係研究者の数が限られているため、関東方面からゲスト・スピーカーを招くなどして報告の幅を広げようと努力している。

班員 山本有造 奥村弘 古屋哲夫 山室信一（以上所内） 井村哲郎（アジ研・図書資料部） 岡田英樹（立命館大・文） 副島昭一（和歌山大・経） 西村成雄（大阪外大・外国語） 松野周治（立命館大・経） 松本俊郎（岡山大・経） 村田裕子（山梨県立短大）

1990年

1月22日 郷土文学と東北のイメージ 村田  
 2月5日 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』に見る「満州国」データ 松本  
 4月23日 打合せ会 全員  
 5月14日 1940年代「満州国」における通貨膨張過程 安富歩（ゲスト）  
 5月28日 満州イメージと満州移民政策 古屋  
 6月11日 満鉄調査部論 井村  
 6月25日 日本における植民地統治思想の展開 山本  
 9月10日 書評・島崎久弥『円の侵略史』1989年 松野  
 10月8日 「満州国」の日系作家 岡田  
 10月22日 「満州国」の祭祀 山室  
 11月12日 「満州国」官制改革をめぐって 古屋  
 11月26日 「満州国」に参加した中国人 副島  
 12月10日 1930年代末の関東州関税制度改革論 松野  
 12月17日 中国東北地区経済史研究の現状と課

題 孔経緯（ゲスト）

明治維新期の研究

班長 佐々木 克

現在の日本近代史研究の傾向は、かつて明治維新を絶対主義天皇政権の誕生とみなした見解から、論者によって様ざまな註釈がつけられながらも、それはブルジョア革命であった、とする理解が主な潮流となっている。こうした変化をもたらしたのは、政治と党派という外的要因を別にすれば、理論と解釈の深化というより、60年代後半から急速に展開した、地方自治体史の編さんの刊行にともなう史資料の発掘と、公・私文書の大量の公開・刊行という、史資料における新たな研究状況の発生がその最大の要因といえよう。しかしながら、明治維新についての発言は、ほぼ近代史の研究者に限られ、また新史料も必ずしも十分に消化・吸収が出来ているとはいえない。そこでこの研究班では、近世史研究者の協力を得て、およそ以下のような方法で研究会を進めている。①新史料を把握した上で、研究史の再検討を試みる。②明治維新を化政期から憲法体制成立期（およそ19世紀全体）に至る長い時空の中で考える。③政治・思想・文化・経済・社会等々さまざまな分野からのアプローチを、ジャンルにとらわれない発想で分析する。④従来は主として維新の変革の面に視点を注ぎがちであったが、連続の面にも留意する。以上のことを基本的な方針として設定し、とりあえず各自の問題関心と当面のテーマをもとに研究発表と討論で研究会を運営している。本年度の研究発表は以下のごとくであるが、しばらくはこうした個別研究を進めて行くつもりである。最終的には、明治維新とは如何なるものであったか、ということを確認にすることを目標としている。

班員 佐々木克 飛鳥井雅道 奥村弘 谷山正道 塚本明 平田由美 藤井譲治 山本有造（以下所内） 青山忠正（大阪商大） 池田宏（滋賀県立図書館） 井上章一 園田英弘（以上日文研） 今西一 鈴木祥二（以上立命館大） 小股憲明（大阪女子大） 高久嶺之助（同志社大） 辻ミチ子（宇治市歴史資料館） 辻本雅史（光華女子大） 原田敬一 藪田貫（橘女子大） 高木博志 手島一雄 三沢純

1990年

1月26日 近代都市史研究の現在 原田

2月9日	国学に於る差別觀念の展開	手島	中井家文書	藤井	
4月27日	京都町奉行所与力・平塚瓢齋	羽賀	9月17日	小堀政一について	藤田
5月18日	明治維新期の領主権力	佐々木	中井家文書	宮本	
6月15日	幕末の政治過程と対外関係	青山	10月8日	井伊直孝について	母利
6月30日	廃藩置県と民衆	谷山	中井家文書	杉田	
7月13日	幕末維新期の京都の下層民と塵芥処理	塚本	10月22日	徳川家光について	藤井
9月28日	反乱士族の組織と心性	佐々木	中井家文書	藤田	
10月19日	京都府教育会の研究にむけて	小股	11月26日	徳川家康について	塚本
11月2日	「市区改正」をめぐる	原田	中井家文書	藤田	
12月7日	大石嘉一郎『近代日本の地方自治』について	奥村	12月10日	慶長16年禁裏築地普請について	横田
			中井家文書	母利	

近世前期における政治的主要人物の居所と行動

班長 藤井譲治

近世前期において重要な役割を果たしてきた人物の多くは、江戸時代一般の像からすれば思いのほか活発な動きをしており、この期の政治史さらには文化史を考えていく上で、彼等のそれぞれの時点での居所を確定しておくことは、基礎的かつ不可欠である。そこで、このような基本的情報を学界全体が共有できるように蓄積し、同時に従来年紀がないゆえに十分に利用されてこなかった主要人物の書状類の年代確定を行う。こうした作業を通じてこれまでとは異なる近世前期の歴史を描くことを目指している。初年度は各自担当した主要人物の居所についての報告を行うとともに、大工頭中井家の文書を輪読し、年代の確定作業を進めた。

班員 藤井譲治 塚本明（以上所内） 杉田善雄（京大研修員） 宇佐美英機（橘女子大） 藤田恒春（関西大） 横田冬彦（神戸大） 母利美和（彦根城博物館） 宮本裕次（神戸大大学院）

1990年

4月9日	打合せ会	全員
4月23日	永井尚政について	藤井
	中井家文書	藤田
5月14日	中井正清について	横田
	中井家文書	塚本
6月11日	板倉重宗について	塚本
	中井家文書	母利
6月25日	徳川秀忠について	藤井
	中井家文書	横田
7月9日	中坊秀政・時祐について	杉田

西 洋 部

法的思考の研究

班長 山下正男

20世紀における論理学の研究はまことにめざましいものがあるが、そうした論理学はすべての存在の論理学と呼ばれるべきであって、当為の論理学の研究は大そうおこなわれている。本研究はそうしたアンバランスを是正することを目的とする。

そのために(1)義務論理学(deontic logic)の確立、(2)法律家たちの現場における法的思考法の分析、(3)一般人の倫理・道徳の場における思考上の分析、等の諸作業をおこないたい。以上の作業は理論学、法学、倫理学の各分野の専門家たちが共同しておこなうものとする。

班員 山下正男 井狩彌介（以上所内） 足立幸男（教養部） 阿部昌樹 川浜昇 田中成明 山本克己（以上法学部） 浜野研三（文学部） 今井弘道（北大） 植松秀雄 江口三角（以上岡山大） 亀本洋（金沢大） 玉木秀敏（大阪学院大） 服部高宏（国学院大） 平野仁彦（三重大） 深田三徳（同志社大） 松浦好治（大阪大） 森際康友（名古屋大） 山本顕治（滋賀大） 若松良樹（東和大） 平井亮輔 中山竜一

1990年

1月12日	道徳的相対主義について	浜野
1月26日	J.S.ミルにおける権利論と功利主義	今井
4月27日	法的議論を基礎づける二つの思考について	平野
5月11日	急進的資本主義の思想	アスキュー

5月25日	「法と言語」に関するもう一つのアプローチ 中山	—ビッルンガーとリュネブルク修道院— 早川
6月8日	平井宜雄教授の法解釈論の検討 田中・植松・亀本・山本	2月13日 家族の権力構造—『孕んだ男』を中心として— 大黒
6月22日	リベラリズム, 中立性, 対話 平井	4月17日 イギリス帝国を形成した農民たち —1770年代の出国者調査を中心に— 川北
7月13日	高度資本主義社会日本における法思考 森際	24日 ジャーヒリア時代(イスラム以前)の家族と結婚 川本
7月20日	現代法理論と悪法論 松浦	5月15日 17・18世紀日本の家訓について 横山
9月28日	政治的正当化をめぐる最近の議論について 玉木	22日 ビザンツにおける結婚・夫婦 井上
10月12日	第一回研究会総括 全員	6月5日 15-16世紀のドイツにおける相続と家族 三成
10月26日	法学に対する非専門家からの苦情と提案 山下	19日 近世期フランスの相続慣行——農村の場合—— 阿河
11月9日	「法と経済」に関する論点の整理 川濱	26日 『ユスティティア』座談会の構想 —中間総括をかねて— 全員
11月20日	法的思考とは何か 亀井	7月10日 『ユスティティア』座談会 全員
12月14日	討議倫理と共同体主義 植木	9月18日 ラウダーティオ・パレントゥムをめぐって 江川
<b>家族とハウスホルドの比較史的研究</b> 班長 前川和也		25日 近世のポーランドにおける異身分間の男女関係 小山
工業化以前の社会では、「家族」ないし「ハウスホルド」が個人と社会、国家をつなぐ結節点として機能した。本研究では、前工業化社会の「家族」、「ハウスホルド」の多様性を考察している。現在では、結婚や相続にまつわる諸慣行やライフサイクルの諸問題等に班員の関心が集まっており、旧来の見解とは合致しない新事実も発掘されつつある。今後は、このような多様性を確認しつつも、「家族」や「ハウスホルド」が社会、国家の中でもった意味をあらためて問い直さねばなるまい。		10月2日 英国近代家族の特質—都市と農村— 安元稔(駒沢大)
班員 前川和也 岩熊幸男 佐々木博光 田中雅一 富永茂樹 横山俊夫(以上所内) 夫馬進(学内) 阿河雄二郎 南川高志(以上大阪外大) 井上浩一 大黒俊夫(以上大阪市大) 江川温 川北稔(以上大阪大) 川島昭夫(神戸市外大) 川本正和(奈良産業大) 小山哲(島根大) 鈴木利章(神戸大) 田中峰夫(甲南大) 波多野敏(京都学院大) 早川良弥(梅花女子大) 三成美保(奈良県立医大) 山辺規子(京都橘女子大)		16日 マリア崇拜のクロノロジー—聖家族について— 鈴木
1990年		23日 中国清代における未亡人擁護団体とその施設 夫馬
1月23日 人類学における家族とハウスホルド 田中雅		11月6日 日本中世都市における家・世帯・女性の役割 脇田晴子(大阪外大)
1月30日 10, 11世紀における貴族と構造変化		20日 「黙示の共同体」とその解体 —18・19世紀を中心に— 波多野
		27日 家を去った男たち—ドイツ騎士修道会士の出自— 佐々木
		12月11日 中世イタリアの嫁資 山辺
		<b>民族誌記述の方法をめぐって</b> 班長 谷 泰
		前年は、執筆を前提とした報告を重ねていったが、本年は最終段階として、提出された論文原稿の合評会をおこない、共同研究を終了した。成果は、共同研究報告『文化を読む—フィールドとテキストのあいだ』人文書院、1991年2月出版予定

知識と秩序—近代におけるその再編過程—

班長 阪上 孝

フランス革命をはさんで18世紀半から1830年頃にかけての時期は、政治・経済の領域のみならず知識の領域においても大きな革新が進行し、しかも、知識と社会の関係が大きく変化した時代である。社会秩序は神によって与えられたものではなく人間が創るものだという新たな前提のもと、秩序の建設のための知識の形成、その知識の制度化・社会化が重要な課題となり、またそれに伴って社会における知識人集団の問題が現れてくる。本研究は、フランス革命期を中心に知識と秩序の関係を多角的に検討することにより、近代社会の問題性をその原点において把握することを目的としている。現在、その最終年度を終え、報告書の刊行を目指して班員各自の論文執筆とその検討作業を進めている。

班員 阪上孝 富永茂樹 大浦康介 光永雅明（以上所内） 浅田彰（経済研） 大東祥孝（保健診療所） 木崎喜代治（経済学部） 服部春彦（文学部） 石井三記（和歌山医大） 市田良彦（大阪女子大） 岡本明（広島大） 小林清一（滋賀短大） 芝井啓司（関西大） 谷川稔（奈良女子大） 田中秀夫（甲南大） 西川長夫（立命館大） 林学（徳島文理大） 樋口謹一（仏教大） 山田慶児（日文研）

1990年

- |       |                   |    |
|-------|-------------------|----|
| 1月26日 | フレデリック・ハリスンの労働組合論 | 光永 |
| 2月23日 | ギベールの軍制改革論        | 市田 |
| 3月9日  | ロベスピエールの死について     | 富永 |

知識と秩序（Ⅱ）

班長 阪上 孝

本研究班は、3月で終了した共同研究「知識と秩序」の成果をふまえつつ、さらにフランス革命期以降の近代諸国家の形成まで視野を広げ、科学的知識と社会秩序の相互関係の再検討を進めている。初年度の現在は、フランスを中心として、アメリカ、イギリス、日本の近代化についての報告・討議を積み重ね、基本的な問題点の整理につとめている。

班員 阪上孝 富永茂樹 大浦康介 光永雅明（以上所内） 浅田彰（経済研） 大東祥孝（留学生センター） 木崎喜代治 田中秀夫（以上経済学部） 服部春彦（文学部） 松本雅彦（医療技術短

大） 石井三記（和歌山医大） 市田良彦（大阪女子大） 小西嘉幸（大阪市大） 小林清一（滋賀短大） 小林道夫（大阪市大） 小山俊輔（甲南女子大） 西川長夫（立命館大） 室井尚（帝塚山学院大） 山田慶児（日文研） 小川伸彦 水嶋一憲（以上京大大学院） 石村雅雄（日本学術振興会）

1990年

- |        |                          |       |
|--------|--------------------------|-------|
| 4月27日  | 原稿打合せ                    | 全員    |
| 5月11日  | 研究の方向をめぐって               | 阪上    |
| 5月25日  | エコール・サントラルの成立—イデオログの教育論— | 阪上    |
| 6月8日   | エコール・ド・マルス—ジャコパンの技術教育—   | 富永    |
| 6月22日  | アメリカン・デモクラシーと法           | 小林（清） |
| 7月6日   | 保証の転移—抑止論の成立—            | 市田    |
| 9月28日  | 美德と効用の間—ジャコパンの知識観—       | 富永    |
| 10月12日 | 「クレストメシア」から国民的エリート形成へ    | 光永    |
| 10月19日 | 文明と文化の間                  | 西川    |
| 11月2日  | ラ・ボエシー『自発的隷従』をめぐって       | 水嶋    |
| 11月16日 | 国宝の誕生—和魂と洋才の結合—          | 小川    |
| 11月30日 | ナポレオンへの報告書               | 大浦    |
| 12月14日 | アヴァンギャルドと自己編集的身体の誕生      | 室井    |

伝統文化の構造—古代インドとインド・ヨーロッパ諸民族の文化比較—

班長 井狩彌介

本研究班は最終年度を迎え、前年度に引続いて北西インドのカシミール地域におけるヒンドゥーイズムの伝統文化がどのように編成されたかの諸問題を、同地最古のヒンドゥーイズム文献「ニールマタ」を中心に検討を進めてきた。現在、同書に記される儀礼、暦法、聖地伝承神話などの中心主題に関して、ヒンドゥーイズムの他の同種文献、後代の綱要書（ダルマニバンダ）などとの比較を通じて本書の内容特徴を明確化する作業を進めると共に、本研究の最終成果として刊行を予定している論文集の作成に向けて、各班員が執筆中の個別論文の中間発表と討議を重ねている。

班員 井狩彌介 ミヒヤエル・ウィッツェル 船山徹 山下正男（以上所内） 狩野恭 徳永宗雄 御牧克己（以上文学部） 赤松明彦（九州大） 永ノ尾信悟（国立民族学博物館） 榎本文雄（華頂女子短大） 黒田泰司 八木徹（以上大阪学院短大） 島岩 引田弘道（以上愛知学院大） 正信公章 渡瀬信之（以上東海大） 竹中智泰（常葉学園大） 中谷英明（神戸学院大） 林隆夫（同志社大） 藤井正人（大阪大） 矢野道雄 山上證道（以上京都産業大）

# フランス・ロマン主義の研究 班長 宇佐美 齊

1990年3月にいたる過去3年間にわたって、フランス・ロマン主義の多角的な分析とその総合をめざして、各班員の口頭発表、討論を中心に研究会を積み重ねてきた。活動開始後4年目にあたる4月以降は、成果報告書の作成に向けて論文の執筆作業にばかり、初稿のできたものから順次検討会にはかって相互批判を重ねた。執筆者全員の最終稿が出揃った秋以降は、編集作業と平行して、これまでの成果を踏まえつつ更に新たな展望を切り開くべく、いくつかの口頭発表がなされた。なお成果報告書は1991年3月に、筑摩書房より刊行される。

班員 宇佐美齊 大浦康介 阪上孝 鈴木啓司（以上所内） 浅田彰（経済研） 稲垣直樹（教養部） 井上輝夫（慶応大） 柏木隆雄（大阪大） 柏木加代子（京都市芸大） 小西嘉幸（大阪市大） 小山俊輔（立命館大・非） ジャン＝マリー・シェフェール（フランス国立科学研究センター） 島本浣（帝塚山学院大） 丹治恒次郎（関西学院大） 露崎俊和（千葉大） ピエール・ドゥヴォー（甲南女子大） 内藤高（同志社大） 西川長夫（立命館大） 丸岡高弘（南山大） 吉田典子（神戸大）

1990年

- 1月27日 ユゴー、断片の詩学 丸岡
- 2月17日 イギリス・ロマン主義  
(ゲスト) 藤井治彦
- 3月10日 フランス革命とロマン主義 西川
- 3月24日 モーリス・ド・ゲランにおける  
「私」の問題 宇佐美
- 4月14日 原稿検討会・編集打ち合わせ（鈴木、  
小山論文）
- 4月28日 原稿検討会（露崎、丸岡論文）

- 5月12日 原稿検討会（ドゥヴォー、柏木加論  
文）
- 5月26日 原稿検討会（稲垣、吉田、丹治論文）
- 6月16日 原稿検討会（西川、宇佐美論文）
- 6月30日 原稿検討会（島本、柏木、大浦論文）
- 7月7日 原稿検討会（クリスタン、小西、内  
藤論文）
- 9月8日 最終原稿提出・編集打ち合わせ
- 9月22日 ジャン＝マリー・シェフェールの文学  
理論 大浦
- 10月13日 日本におけるロマン主義  
(ゲスト) 饗庭孝男
- 10月27日 編集打ち合わせ
- 11月10日 Le romantisme et la sacralisation  
de l'art シェフェール
- 11月24日 編集打ち合わせ
- 12月8日 序文原稿（宇佐美）検討  
カント哲学と現代思想のはざまで読  
む『オーベルマン』の自我 鈴木

## 儀礼的暴力の研究

班長 田中雅一

初年度（1990年）は主に多様な視点より暴力の宗教的意味合い、および儀礼における暴力的要素を論じた。

班員 田中雅一 井狩彌介 鈴木啓司 谷泰 富永茂樹 藤田隆則（以上所内） 菅原和孝（教養部） 阿部泰郎（大手前女子大） 大越愛子（近畿大） 大塚和夫 田辺繁治 吉田憲司（以上国立民族学博物館） 小田亮（桃山学院大） 春日直樹（奈良大） 川村邦光 松村一男（以上天理大学） 栗本英世（東京外大） 長島佳子（大阪学院大） 松田素二（大阪市立大） 三浦耕吉郎（仏教大） 岡田浩樹（総合研究大学院大学博士課程） 棚瀬慈郎（学振特別研究員） 西井涼子（京都大学大学院社会学博士課程）

1990年

- 4月23日 問題提起 田中
- 5月7日 供犠論の再検討—儀礼的殺害を巡る  
三つの解釈文脈— 谷
- 5月14日 若ものの力の行方—明治期における  
民俗・風習の解体／回収— 川村
- 6月11日 北タイの供犠と憑依 田辺
- 6月25日 フランス革命と暴力—政治と宗教と



	の関係について—	富永
7月2日	暴力のテキスト・テキストの暴力— 予備的報告—	大塚
7月16日	邪術と変身	吉田
9月10日	舞台の上の暴力—ギリシア悲劇の女 性たち—	松村
10月15日	「暴力論」論	鈴木
11月5日	儀礼的暴力と実体的暴力のあいだ	菅原
11月26日	フェミニズムが読む文化・性・暴力	大越

## 東 方 部

### 中国近世の法制と社会

班長 梅原 郁

本研究班では、1986年から4年間に亘って中国近世、特に宋代の重要な法制史料である『慶元条法事類』と明板『名公書判清明集』とを精読してきたが、最終年度に当たる本年は5月以降、こうした蓄積をもとに中国近世の法制・社会に関する研究発表を中心に行なった。

### 中国科学史文献研究

班長 山田慶児

1987年度から「中国科学史文献研究」班を組織し、3か年の予定で、これまであまり取り上げてこなかった諸種の文献の検討を進めている。とりあげる文献は大きく二つに分かれる。一つは、最近出土した科学文献のうち、『新発見中国科学史資料の研究・訳注篇』を公刊した時点以後に公表されたもの。これはすでに訳注の作成を終えている。一つは、中国科学の個々の達成よりむしろ、中国科学の方法・思想・組織、あるいは外国の知識の受容過程にわたる文献。これまでに数学・天文学・本草・建築などの文献数種を読みすすんできた。会談にとりあげた文献はすべて訳注を作っている。また最終年度にあたり、会員が別に研究論文の執筆をすすめ、『中国古代科学史論・続篇』として報告書にまとめ、現在印刷中である。

### 文人の生活

班長 荒井 健

1986年より向う5年の予定で、旧中国の文人の生活全般について、「江南文人の研究」班の成果をふまえ、精神的・物質的両面から総合的な検討を行ってみようという目標で、本研究班を発足させる。旧江南文人班よりは一層広範・包括的な題目をあえて

選んだのは、班員のおおのの関心のありようからして、研究対象をむしろ限定しないほうをよしと考えたためである。研究の進めかたとしては、旧班と同じく、各分野の報告と並行して、明代16世紀末の最も広範囲の文人趣味文献たる「遵生八牋」の内容を検討して行く。今期は塵外遐举・起居安楽・延年却病・飲饌服食の各牋および燕閑清賞牋の一部に眼を通した。なおこれまで会談を続けた「長物志」は全巻の訳注稿を整理中。

### 4—8世紀の中央アジアとインド

班長 桑山正進

1986年4月より5年計画で開始した当研究は1990年度をもって終了する。当期間は、特に8世紀の行紀である恵超「往五天竺國傳」と「悟空行紀」とを取り上げ、その現代日本語訳を作成することに集中した。本年度は全面的に訳の見直しを出版にむけて行ない、ほぼこれを完成した。訳作成の過程においてあらわれた歴史、言語、宗教に関する多岐にわたる疑問とその解答は、班員の各専家が注釈の形でこれを付す計画であり、目下鋭意作成中である。なお、12月3日には北京大学歴史系副教授兼新江氏の、「中国における最近の中央アジア研究と現状」と題する講演を人文科学協会の協賛によって行なった。

### 六朝道教の研究

班長 吉川 忠夫

1986年4月に発足した本研究班もいよいよ最終年度をむかえた。これまでに、梁の道士陶弘景が編纂した『真誥』7篇全20巻のうち、第1巻から第8巻までと第19・20巻との訳注をおえたほか、前年同様、下記の研究発表をおこない、活動に一応のしめくくりをつけた。なお、研究成果の一部は『中国古道教史研究』としてまとめ、出版する予定である。

### 1920年代の中国

班長 狭間 直樹

本研究会は、1988年より向こう5か年という予定で発足しその3年目に達したが、さきだつ「国民革命の研究」班の成果をふまえながら、研究対象とする時期を「20年代」にしばることによって、時代史的視角から国民革命期中国の諸相をとらえなおそうとするものである。各班員が、政治、経済、社会、思想、文化などの諸テーマについて研究をすすめていることは以前と同様である。また、国外の研究者とも積極的に交流の機会をもつようつとめている。

中国中世の文物

班長 礪波 護

本研究班では昨年に引き続き、隔週水曜日の研究会で、秦漢から五代に至る時代の出土文物に関する班員の研究発表が行われた。

中国古代礼制研究班

班長 小南 一郎

開始より2年目になる本研究班は、引続き「周礼」春官篇を賈公彦の疏で読みつつ、本文と鄭注とを和訳し、注釈を付ける作業を進めている。本年は、礼の場で用いられる酒や敷き物や玉器などに関する定めを読んで、1990年末までに典瑞職まで進んだ。

六朝美術の研究

班長 曾布川 寛

1990年4月から5年の計画で始まった本研究班は、六朝を中心に後漢、隋唐を含めた時代を扱い、この時代的美術全般についてより精確な理解を目指そうとするものである。具体的方法としては発掘報告の相継ぐ出土文物、石窟寺院が急激な速度で公開されつつある仏教美術、この時代に興った画論や書論の芸術論を三本の柱に取り上げることとする。初年度は班員の各々専門分野における以下のような研究発表を行い、非公式に画論の会読、石窟関係の造像記の会読を行った。

中国語史の資料と方法

班長 高田時雄

本研究班は、中国語史を総体的に再構築することを目指とし、資料と方法の面からその基礎的整備を行うべく、今年度から新発足した。

客 員 部 門

漢代出土文字資料の研究

班長 永田英正

本研究班では昨年に引に続き、主に漢代石刻資料の釈読と注釈を進めてきた。班員が分担して作成した訳注を毎週の研究会で検討し、最終年度である今年度には、残欠のあるものも含めて主要なものは全てを読み終えることができた。また、研究会と平行して、敦煌漢簡と研究所未収の石刻資料をカード化する作業も終了した。なお、3年間に亘って続けられてきた訳注作業の成果は、近年中に『漢代石刻資料集成』（仮題）として発表される予定である。

Ⅱ 個人研究

日 本 部

日本近代文化史の研究	飛鳥井雅道
日本のファシズムの研究	古屋 哲夫
植民地経済の研究	山本 有造
廃藩置県の研究	佐々木 克
文化史および文明史としての国民国家の形成	横山 俊夫
日本近世社会における政治権力	藤井 譲治
政治文化の中の社会理論	山室 信一
日本近代文学の研究	平田 由美
近代日本形成期における地域構造	奥村 弘
日本近世の地域社会の研究	塚本 明

西 洋 部

西洋論理思想史	山下 正男
社会的相互行為の解説	谷 泰
思想と制度	阪上 孝
シュメール行政・経済文書の研究	前川 和也
インド世界の儀礼の研究	井狩 彌介
フランス散文詩の研究	宇佐美 齊
群衆現象の社会学	富永 茂樹
南アジアにおける宗教と社会	田中 雅一
文学理論の研究	大浦 康介
ヨーロッパ12世紀の論理学と意味論	岩熊 幸男
西欧中世の身分論と社会メタファー	甚野 尚志
デカダンス文学における自己矛盾の研究	鈴木 啓司
音声形式の記述と分析	藤田 隆則
フレデリック・ハリソンとイギリス実証主義	光永 雅明
ドイツ中世のエトノス	佐々木博光

東 方 部

中国の詩学	荒井 健
宋代の官僚制度	梅原 郁
六朝隋唐精神史	吉川 忠夫
隋唐政治社会史研究	礪波 護
五四時期中国社会主義の研究	狭間 直樹
ポスト＝クシャーン期中央アジアの考古学的研究	

人 文 学 報

古代中国における説話伝承の研究  
中国中世土地所有制の研究  
六朝道教思想研究  
中国美術の様式と意味  
中国建築の様式・技法・空間  
近代中国の綿紡職業  
敦煌文書の言語史的研究  
中国古代中世の法制  
東北作家の文学  
明清学術史の研究  
清朝前期における士大夫の思想  
中国古代都市の研究  
漢唐間における天文学と文化  
中国における革命主体形成の研究  
中世近世の中国絵画研究  
イスラーム勢力進出期のアフガニスタン・北インド  
唯識思想研究  
中国中世の政治と社会  
中国共産主義運動の歴史と思想  
唐宋時代の士人

桑山 正進  
小南 一郎  
勝村 哲也  
麥谷 邦夫  
曾布川 寛  
田中 淡  
森 時彦  
高田 時雄  
富谷 至  
村田 裕子  
井上 進  
三浦 秀一  
佐原 康夫  
新井 晋司  
小林 敦子  
河野 道房  
稲葉 稜  
船山 徹  
辻 正博  
石川 禎浩  
中砂 明德

奥村 弘  
大浦 康介  
梅原 郁  
ロマン・ロマンス・ロマンティック  
律令と勅令 一唐から宋へ一

研究成果の刊行

I 紀 要

人文学報 第66号（創立60周年記念論集）

「小説」とはなにか 飛鳥井雅道  
「満州国」街村制に関する基礎的考察 奥村 弘  
東京「遷都」の政治課程 佐々木 克  
虚構の時間と時制の形式 平田 由美  
大名城郭普請許可制について 藤井 譲治  
近代日本における徴兵制度の形成課程 古屋 哲夫  
普遍的観点からみた象徴天皇制 山下 正男  
関東州貿易統計論 山本 有造  
日用百科型節用集の使用態様の計量分析法に  
ついて 横山 俊夫  
中村賢二郎教授略歴・著作目録

東方学報 第62冊（創立60周年記念論集）

漢代郡縣の財政機構について 佐原 康夫  
歴法の発達と政治課程 一漢代を中心に一  
新井 晋司  
吉川 忠夫  
王遠知伝  
芸文類聚の条文構成と六朝目録との関連性に  
ついて 勝村 哲也  
中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構  
田中 淡  
曾布川 寛  
響堂山石窟考  
唐・玄宗御注『道德真經』および疏撰述を  
めぐる二、三の問題 麥谷 邦夫  
李娃伝の構造 小南 一郎  
李義山特集再考一明清諸本覚え書一 荒井 健  
ウイグル字音史大概 高田 時雄  
王詵について一二画風併存の問題一 河野 道房  
宋代の戸口問題をめぐって 梅原 郁  
蔵書と読書 井上 進  
彭紹升と戴震の思想圈 三浦 秀一  
宋教仁にみる伝統と近代一《日記》を中心に一

事 業 概 況

人文科学夏期講座

1990年 8 月 於 本館大会議室  
一世界再読一  
1 日 古文の現代語訳一その源流と原理をめぐっ  
て一 T・ハーバー  
「内地」と「外地」一明治憲法と日本植民  
地一 山本 有造  
2 日 最近の中国からの人材流出 小林 敦子  
性の刑罰一宮刑一 富谷 至  
3 日 知的エリートと民主主義一ヴィクトリア朝  
イギリスの社会再編成一 光永 雅明  
日本の城とヨーロッパの城 山下 正男

開所61周年記念公開講演会

1990年11月 8 日 於 本館大会議室  
明治地方自治制からみた明治憲法体制

	狭間 直樹
「一九二三年恐慌」と中国紡績業の再編	
	森 時彦
陳独秀と「二回革命論」の形成	江田 憲治
山丁・『山風』・郷土文学	村田 裕子
部分と全体—インド仏教知識論における概要と	
後期の問題点—	船山 徹
セルジュク朝と後期ガズナ朝—その国境地帯	
について—	稲葉 穰
尾崎雄二郎教授著作目録	
林 己奈夫教授著作目録	

## Ⅱ 研究報告その他

明治中期読売新聞文芸関係記事目録(調査報告36号)	平田由美編
慶元条法事類語彙輯覧	梅原 郁編
カーピシー＝ガンダーラ史研究	桑山正進編
所報「人文」36号	
要覧 13号	

## 所 員 動 静

- ・村田裕子助手(東方部)は、辞任(3月31日付)の上、山梨県立女子短期大学国際教養科助教授に転出
- ・佐原康夫助手(東方部)は、滋賀大学教育学部講師に昇任(4月1日付)
- ・甚野尚志助手(西洋部)は、東京大学教養部助教授に昇任(4月1日付)
- ・相川佳子奈良女子大学家政学部教授は、併任教授(東方部)。(比較文化部門、4月1日～1991年3月31日)
- ・谷山正道広島大学助教授は、併任助教授(日本部)。(比較文化部門、4月1日～1991年3月31日)
- ・富谷 至助教授(東方部)は、大阪大学教養部講師より昇任(4月1日付)
- ・石川禎浩氏を助手(東方部)に採用(4月1日付)
- ・佐々木博光氏を助手(西洋部)に採用(5月16日

- 付)
- ・中砂明德氏を助手(東方部)に採用(12月1日付)
- ・桑山正進教授(東方部)は、3月8日伊丹発、インドに於いて、仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究を行い3月17日帰国。
- ・前川和也教授(西洋部)は、7月16日伊丹発、大英博物館においてシュメール楔形文書の研究及びライデン大学において同出版打合せを行い、8月20日帰国。
- ・田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科学研究費補助金により、7月17日伊丹発インド・デリー、マドラス市内において上座部仏教圏における宗教と社会についての研究調査を終え、8月25日帰国。
- ・田中 淡助教授(東方部)は、8月1日成田発、ケンブリッジ大学ニーダム研究所において開催の第6回中国科学史国際会議に出席、併せて大英博物館において研究資料蒐集を行って8月11日帰国。
- ・狭間直樹教授(東方部)は、8月1日伊丹発、中国、香港、マカオにおいて開催された国際學術討論会に出席、併せて研究資料蒐集を行って9月3日帰国。
- ・森 時彦助教授(東方部)は、8月1日伊丹発、香港において開催の「近百年來之中国關係国際學術研討会」に参加して8月14日帰国。
- ・梅原 郁教授(東方部)は、8月27日伊丹発、上海博物館、雲南省博物館、敦煌博物館等において、唐宋文化社会の研究に関する資料蒐集を終え、9月10日帰国。
- ・船山 徹助手(東方部)は、10月1日伊丹発、ウィーン大学において、ジュニャーナシュリーミトラの研究(インド仏教知識論の研究)を行い1991年7月31日帰国予定
- ・曾布川寛助教授、河野道房助手(東方部)は、10月3日伊丹発、中国において開催の敦煌学国際學術討論会に出席し、併せて中国美術資料蒐集を終え、10月28日帰国。
- ・田中 淡助教授(東方部)は、10月7日伊丹発、中国において貴州トン族の高床住居と集落構造に関する調査と研究を行い、10月27日帰国。
- ・田中雅一助教授(西洋部)は、12月8日伊丹発インド・デリー大学、マドラス大学においてインド

寺院文化に関する研究資料蒐集を行い、1991年1月11日帰国予定。

- 長広敏雄名誉教授は11月28日逝去された（84才）。